

京大広報

号 外

京都大学広報委員会

文学部博物館新営開館特集



東大路に面した新営博物館の正面玄関

目 次

文学部博物館の歴史と現在.....	376	歴史資料部門.....	380
開館記念展示“日本の中の京都”.....	377	地図・民族資料部門.....	380
各資料部門の紹介.....	378	美術資料部門.....	381
考古資料部門.....	378	建物と観覧の案内.....	382

文 学 部 博 物 館 の 歴 史 と 現 在

京都帝国大学が創設されたのは1897年（明治30）のことであった。その当時から、やがて開設される文科大学に博物館を置くとの構想があり、初代総長木下広次のもとで、各種の資料の収集ははじめていた。

このころ、明治維新以来続いた欧化一辺倒の風潮への反省から、わが国の伝統的文化や社会的現実に関心を向けようとする動向が生まれていた。前近代における文化の中心であった近畿地方に新しくできた大学として、地域の資料を収集・研究することは、大学の存在理由にかかわる課題ともとらえられていた。

1907年（明治40）9月の文科大学史学科の開設に先立ち、同年5月史料編纂官であった三浦周行に「国史材料の蒐集」が嘱託された。これが公的な意味での収集活動の開始といえる。三浦は、精力的な採訪・調査を行い、31年（昭和6）国史第二講座の教授を退官するまでに、2万点をこえる古文書・古記録を集めた。

一方、わが国最初の考古学講座創設の任を帯び、イギリスに留学、ペトリに学んだ濱田耕作は、帰国後1916年（大正5）講座を開設、翌年から近畿以西各地の学術的発掘をつぎつぎに手がけた。その足跡は朝鮮・中国におよび、当時、東アジアのこの分野におけるほとんど唯一の学術的中心として、多彩な活動を続けた。その収集品は、文字どおり日本考古学の発達史を示すものとなっている。

1914年（大正3）標本陳列のための建物がはじめて建設され、陳列館と名づけられた。現在の旧館正面部分にあたる。その後、1923年、24年、29年（昭和4）と3次にわたる増築をへて、回廊形式の中庭をもつ美しい建築が完成した。史学科の全教室と、哲学科の美学美術史学教室の一部がここに入り、陳列館はこれら学問分野の研究教育棟として、京大史学の伝統をかたちづくり、幾多の

人材をうみだす母胎となった。

収蔵資料は、国史・考古学両教室のほか、地理及び美学美術史学をふくむ4教室を中心に収集が続けられ、今日、総数30万点以上に達している。いずれも、大学の研究教育に奉仕することを第一義とし、それとの密接な結びつきのもとに集められたもので、わが国では最古の、かつほとんど例のない、大学博物館の活動を行ってきた。

しかし、その価値が内外に認識されるにともない、事実上の管理が講座に任されてきたことの限界も目立ち始め、文学部では、1955年博物館相当施設の指定を受け、部内に運営委員会を置き、59年陳列館を博物館と改称、組織の再編に着手した。その目的は大学博物館としての制度をととのえ、機能を十全に発揮させることにあった。

ところが、活発な活動によって早くから建物の狭隘化が嘆かれていたのに加え、ここにいたり老朽化が、貴重な資料の保存にとって放置しえないまでに進行してきた。このため、まず改

築を急ぐこととし、このたびの開館となったのである。

昨年7月竣工した新館は4階建て（地下1階機械室）、旧館の西と北の部分を解体し、周辺を整備して建てられた。東大路に玄関を開き、1・2階の総合展示室と企画展示室は一般公開を予定し、3階の講演室では公開講座等も計画されている。それ以外の部分は、収蔵室のほか、土器・木器などの処理室、古文書・地図などの工作室、各研究展示室、研究室、書庫などからなり、旧館の美術資料室・考古学工作室・古文書室・情報処理室などとともに、研究教育棟として、内外の専門分野の研究者・学生の利用に供される。

文学部では、学部の研究教育を保持しながら、共同利用施設として活用していく方策を検討中である。各位のご支援とご鞭撻を願っている。



三角縁三神五獣鏡 鏡背の鈕をめぐる主要な文様が3神5獣からなることを示し、埋葬時の朱が残る。京都椿井大塚山古墳出土。

開館記念展示“日本の中の京都”

京都大学文学部博物館の開館を記念して特別展「日本の中の京都」がはじまる。展示されているのは、ごく一部に学外からの出品もまじっているが大部分は文学部国史研究室、附属図書館の古文書・古記録の優品を中心として、人文地理学・美学美術史学研究室、法学部、経済学部の収蔵品ないし寄託品からなっている。

京都は長い間、日本の中心であり、日本の政治、経済、文化は京都を軸にして旋回していた。時代時代に京都文化があり、京都の経済システムがあり、京都の政策と政治があった。わが大学がみずからの学問形成を始めるよりもはるかに先駆けて、京都は長い文化の歴史を持ち、それが京都大学成立の前提をなしたのであった。さいわい京都大学には京都の歴史と文化を語る貴重な史料が多数蔵されている。今回の展示を機に、京都の持つ多方面にわたる歴史の跡を振り返り、京都の歴史と学問の意味を問うてみるのも有意義なことであろう。

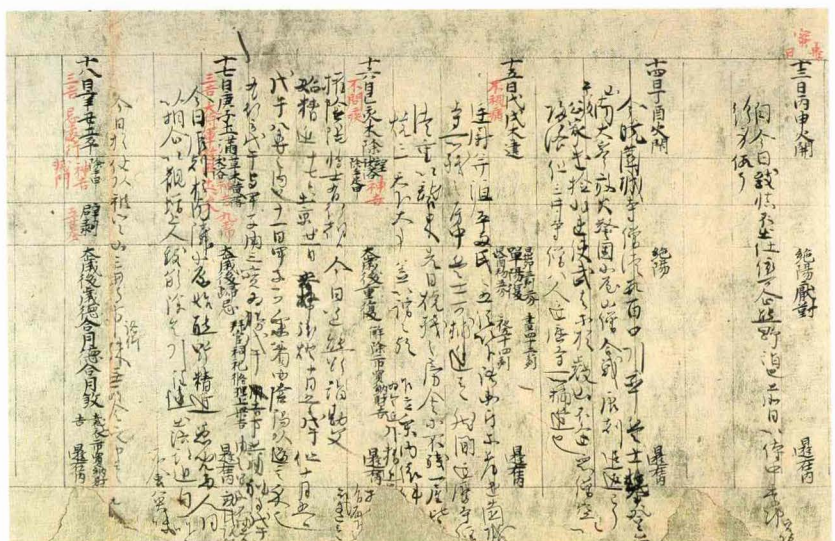
会場の入り口近く、まず目につくところに「杉横目の扇」(壬生家伝来)がある。杉の木目を波に見たてて海浜の風景を描いたもので、王朝文化の粋を示す優美な扇である。王朝の公家文化にかかわるものとしては、何と言っても日記が中心になる。平安時代の自筆の公家の日記として、日本で二番目に古いという藤原為房の「大御記」(重文)をはじめ、同為隆の「永昌記」(重文)・平範国の「範国記」(重文)以下が並ぶ。室町時代の重要史料「建内記」(内大臣万里小路時房)も自筆本である。京都に住んで、公家の政治と文化を支えて来た実務官人の家の日記(「壬生官務家日記」)や、随身の役を勤めた家の系図(「秦系図」)「下毛野系

図」)も興味を惹くであろう。

荘園領主であった天皇家・公家の所領文書も並べられる。後白河上皇以来天皇家、とくに北朝方に伝来された天皇家領の荘園目録として有名な「長講堂領目録」(島田家文書)や勸修寺家の所領を書き上げた「御遺言条々」なども見落とせない。「教王護国寺文書」(重文)からは15世紀神崎川の航路変更を示す絵図をならべた。帆船が京と田舎を往来するさまを描いている。

中世京都の庶民生活にかかわる「六角供御人」の文書は琵琶湖畔に住み、天皇への奉仕のかたわら京都六角に店舗を構えて琵琶湖産生魚を商い、魚鳥の販売独占を行った商人の史料で、京都商業の源流をかたるもの。その真偽をめぐる長い論争は中世商業史研究の歴史そのものである。

鎌倉・室町と時代がたつにつれて、京都にも武家の支配が強くおよび、江戸時代には二条城と所司代板倉などの支配となる。京都の人口も増え、都市改造も進展する。中世から近世にかけての地図類(「拾芥抄」)「元禄京絵図」など大工頭の中井家に伝来(附属図書館)など各時期の京都の地図が並べられている。豊臣秀吉がめぐるしたお土居については「御土居絵図」が、角倉了以開鑿の高



大御記 白河上皇の近臣藤原為房(1049-1115)の日記。平安時代貴族の数少ない自筆日記として貴重。院政初期の政治状況をくわしく記している。

瀬川については「高瀬川絵図」もなげられる。

近世初頭の公家文化の復興ぶりは「年中行事図屏風」に見えるが、中院通勝^{みんどうにつき}「岷江入楚」(源氏物語注釈)が学問の世界を伝え、同家の文書非常持ち出しの「笈」^{おし}も注目をひく。また「洛中洛外図屏風」と「平壤図屏風」の比較は興味深い。

江戸時代の町の生活と仕組みは「三条衣棚町文書」に示される。町が制定した人々の生活と営業を保証するための「町式目(規約)」が並ぶ。

教科書でおなじみの「マリア十五玄義図」(茨木市, 原田家で発見)は聖母マリアの生涯を15の絵図で示し、西洋文明との出会いを語る。旧陳列館の入り口の所にあった「キリシタン墓碑」も一緒に展示される。それぞれ南蛮人風俗と FRCO

(フランシスコ)のローマ字紋章が描かれた二つの鞍も面白い。キリシタン文化は15~16世紀の大航海時代の波に乗って日本へ到来した。地理の研究室が出品した東地中海の「ポルトラーノ海図」は羊皮紙製。16世紀末の「イタリア製地球儀」はまだ南半球に「未知の南方大陸」を描くのだが、ヨーロッパの商人たちはこのような地球儀をたよりに東洋への進出をはかったのであった。最後は「尊攘堂」関係を中心に、明治維新と京都を語る資料。吉田松陰と品川弥二郎の木像が並ぶ。

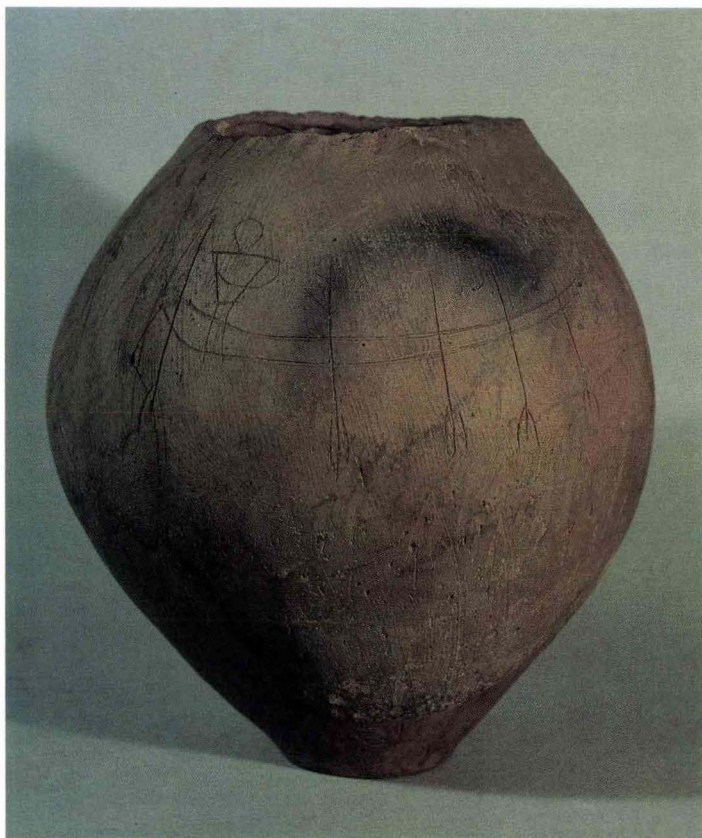
重要文化財 12点を含めて総点数 117, 古文書など長期の展示に堪えないため、展示替えを行う。これだけの史料を殆ど独力で出せるのは、長年の蒐集の賜物である。

各 資 料 部 門 の 紹 介

考 古 資 料 部 門

本館収蔵の考古資料は、実物の資料だけで30万点を越す膨大なコレクションであり、国宝1件、重要文化財2件を含んでいる。その内容は、日本、朝鮮、中国の各時代の資料はもとより、インド、エジプト、ヨーロッパ、アメリカなど世界各地にわたり、海外との学術交流によってもたらされた資料も重要な一部である。また、出土地の明らかな資料の多いことも特色の一つであり、その背景には考古学教室を中心に行われた学術的な発掘調査による出土品が、収蔵資料の主体を占めているという事情がある。そのため、比較研究の基礎資料として、今日でも多くの研究者によって利用されている。

今回の一般公開においては、収蔵資料のなかから、学史的に重要なもの、歴史を学ぶ上で基準となるものを選択して、1階の第一総合展示室に陳列した。まず日本の古代文化の発達を、いくつかのテーマについて旧石器時代から奈良時代まで順次配列し、ついでそ



舟の絵のある弥生土器 舟をこぐ人物と水禽を線刻で表わしてある。この絵がよく見えるように、口縁部は欠けたままにしてある。奈良田原本町唐古遺跡出土。

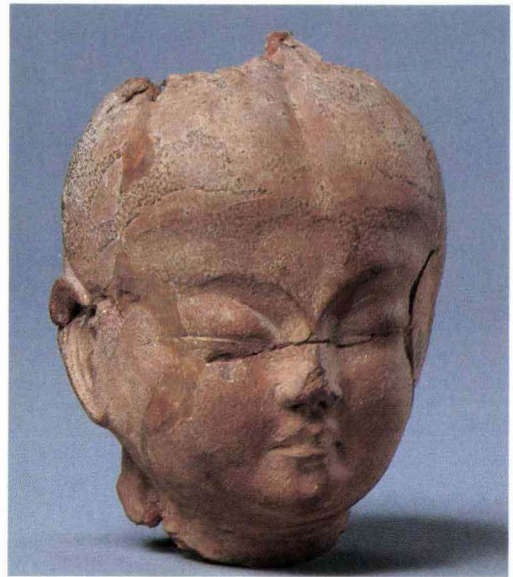
の発達に大きな影響を与えた中国及び朝鮮半島における古代文化の遺物を、日本のそれと比較できるように並べてある。

〔縄文時代の北白川〕の遺物は、その範囲が本学構内にも及ぶ遺跡から出土したもので、1934年の発掘であるが、これらの土器について繰返し詳細な検討が行われて、近畿地方の前期縄文文化編年の基準となっている。左に滋賀里遺跡の〔縄文時代晩期の土器〕を並べ、〔唐古遺跡と弥生文化〕への移行期を説明する。

1937年に行われた唐古遺跡の発掘によって、木製農具や炭化米が出土し、弥生文化が稲作農耕を基盤とすることが確定的となった。普通の遺跡では残りにくい木器が大量に発見されて、弥生時代像を大きくかえた。その上、唐古遺跡の調査とその報告書は、以降の弥生文化研究の基礎となったもので、百余点の重要文化財を含んでいる。一方、九州では弥生文化が、とくに墓制において異なることを、〔須玖岡本遺跡の甕棺墓〕で示し、大陸から輸入された銅剣や銅鏡を陳列する。この遺跡から出土した前漢時代の中国鏡は、弥生時代における北九州と大陸との交渉を示すばかりでなく、弥生時代の実年代を知る重要な証拠でもある。

次に本研究室の主要な研究分野の一つであった〔鏡と前期古墳〕について、椿井大塚山古墳、一貴山鏡子塚古墳、向日丘陵の前期古墳などの出土品を陳列。このなかに問題の三角縁神獣鏡がある。これは周縁の断面が三角形に突出している特徴に着目して名付けられた一群の鏡で、邪馬台国の女王卑弥呼が魏王朝から下賜された銅鏡百枚はこの種の鏡であるが、中国からはまだ発見されていない。この事実をめぐって中国の工人による日本での製作説など、さまざまな解釈が出されている。三角縁神獣鏡には同じ鋳型で作られた鏡の多いことも特徴で、北九州から関東まで分布する。このことは大和王権から船載鏡を各地の首長に分与し、政治的関係を優位のうちに保持しようとしていたことを示すものである。

続いて〔武具・馬具と中後期古墳〕で武具の発達と馬具の導入を示し、古墳から出土する一括品については鴨稲荷山古墳の例によって、後期古墳の構造は石舞台古墳の模型を用いて示す。左に廻って〔古代寺院と墳墓〕と題して、雪野寺の塑像



童子像 塑像で、菩薩形、神王形などともに塔跡から出土した。滋賀竜王町雪野寺跡。

と風鐸、夏見廃寺の^{せんぶつ}塼仏を並べ、屋瓦の変遷によって古代寺院研究の編年の基礎を示す。そして伝統的な形式である木棺墓として、国宝の西野山古墓出土品を並べ、仏教に伴なって新しくもたらされた火葬墓として、重要文化財である北米谷の骨蔵器を陳列する。

濱田耕作教授は、東アジア古代文化の流れの解明に向けて、中国東北地方における先史文化の研究にも先鞭をつけ、研究室の研究分野として継承された。中国の^{ぎやうしやう}仰韶文化に併行する彩陶系の土器と石器、竜山文化の黒陶と玉器、殷前期に併行する出土品を並べて、中国東北地方における先史文化の発達を示す。この文化の流れは、朝鮮半島をへて日本にも伝わっている。本博物館に中国及び朝鮮の資料が多いことも特色の一つで、そのなかから殷墟出土品と、漢代から唐代にいたる^{めいしき}明器と陶俑を中心に陳列してあり、朝鮮半島では三国時代高句麗・百濟・新羅及び統一時代新羅の瓦^が塼類を中心に陳列してある。

最後のケースは〔濱田教授とペトリリー先生〕で、本学考古学講座の創設にあたって濱田耕作教授が考古学の方法を学んだロンドン大学エジプト学教授 W.M. Flinders Petrie 博士と関連する遺物を示す。日本の博物館のなかで、本学のエジプトコレクションは有数のものである。

歴 史 資 料 部 門

国史研究室収集の古文書・古記録・絵画・器物・民俗資料を中心に、東洋史・現代史両研究室収集の諸資料からなる。

国史関係の資料は、古文書等の原本だけで優に5万点を越えている。戦後は、小葉田淳・赤松俊秀両教授在任中に鎌倉時代の漁村史料として貴重な若狭国田烏浦の秦家文書と過書船旗、有名な東寺百合文書と一体をなす教王護国寺文書、藤原氏の分流勸修寺家旧蔵の全文書・記録の収蔵をみたことが特記される。いずれも、そのうちの主なものが重要文化財に指定されている。

このほか、東大寺・同法華堂、興福寺一乗院、春日大社大東家、松尾月読社などの寺社関係文書、公家では、中院・壬生・平松の諸家、武家では、駿河伊達・和泉淡輪・常陸畑田の各氏の文書・記録など、全体に中世文書が多いが、近世のものとしては、水戸徳川家の「大日本史編纂記録」のほか、大洲・臼杵・府内・宮津などの諸藩記録、琉球関係資料もあり、富田林杉山家文書をはじめとする庄屋文書以下、農漁村、鉱山・商工業関係の史料も多い。近代では、明治初期の外交官吉田清成の旧蔵文書が学会の注目するところとなっている。

文書以外では、キリシタン史料としてのマリア十五玄義図が著名であり、大友宗麟所用と伝えるローマ字紋章入り鞍、中院家古今伝授笈などが興味ふかく、近世の肖像画や民俗資料にも逸品が少なくない。

現代史教室収集資料としては、原敬文書他があり、東洋史関係では、吐魯番出土のウイグル文マニ教徒祈願文・慶陵壁画・チンギス汗聖旨牌・西夏文華嚴經・清朝詰命など、貴重な資料が収蔵されている。

本部門では、これら資料の整理と研究をさらに進め、その成果を刊行し、あるいは展示に反映さ



マリア十五玄義図 1920年（大正9）茨木市下音羽の農家で、竹筒に納め棟木に結いつけられているのを発見。聖母マリアの生涯を、喜び・悲しみ・栄光の各五玄義（ミステリオ）図で描く。右下はザビエル、左はロヨラ。

せていく予定であるが、文書・記録・絵画など、脆く、痛みやすいものが多いので、展示の場合、同一資料を長期間置くことができず、頻繁な展示替えを必要とすることを御了解いただきたい。

地図・民族資料部門

地図・民族資料の収集は、わが国最初の地理学講座として、1907年（明治40）5月に旧史学地理学講座が創設されると同時に開始された。ことに翌年小川琢治教授が着任するにおよんで、収集活動は本格化した。以後、資料収集は着実に進められ、今日ではわが国諸大学の中では第一級のコレクションを収蔵するにいたっている。

本部門は、大きく民族資料、古地図・古地球儀及び近代地図の3つに分けられる。民族資料は3階の地図・民族資料研究展示室に、古地図・古地



ポルトラーノ海図 ポルトラーノは地中海世界に羅針盤が伝播してから作られた独特の海図。図上の各所に設けられた方位盤から航路の方角をよみとる。
羊皮紙製 15世紀

紙製ポルトラーノなどがあり、いずれもわが国では類品の少ない貴重なものである。また、古地図帖類のファクシミリ版の収集も進めており、地図史・地理学史研究に大きく資している。

近代地図の収集も活発に行われ、とりわけ、講座創設時に一括寄贈を受けた2万分の1地形図や各種の海図・地質図などは貴重なコレクションとなっている。これ以後も地形図をはじめ、各種の主題図類や、空中写真の収集に努力している。

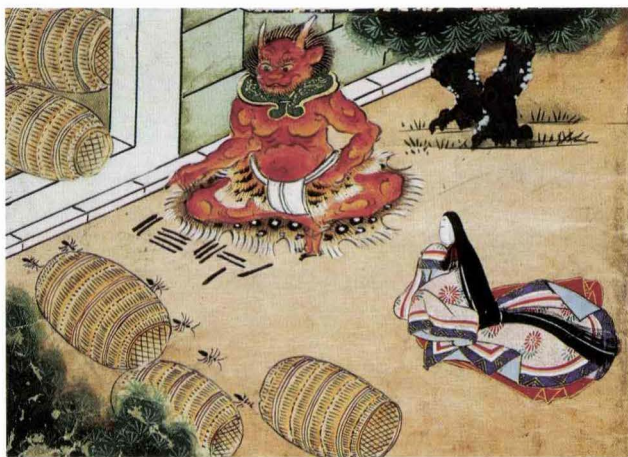
美術資料部門

球儀は4階の古地図・古地誌収蔵室に、近代地図は同じく4階の地理作業室に収蔵されている。

まず、民族資料はアジア・アフリカの各地におよぶが、第二次世界大戦を境にしてその収集領域を異にしている。大戦前の将来品は、中国大陆、台湾、朝鮮半島、サハリンのほか、ミクロネシア、ジャワ、カリマンタンなど東南アジア島嶼部の民族資料を主としている。これに対して、大戦後の収集品は、1959年以降数次にわたって実施されたイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊の将来品のほか、アフリカ・トンガ諸島などの民族資料を含んでいる。

古地図・古地球儀は、本部門資料の中心をなすものである。1673年(延宝6)刊の「日本図」、石川流宣の「本朝図鑑綱目」、鳳譚の「南瞻部洲万国掌菓之図」、高橋景保の「新訂万国全図」など、わが国古地図史上著名なものを多く収蔵している。このほか、中国図・国絵図・町絵図など各種の古地図を網羅している。これら和漢の古地図については、すでに1934・37年(昭和9・12)刊の「地理論叢」3・5・9輯に所蔵目録が分載されている。一方ヨーロッパ関係では、南半球に「未知の南方大陸」を描く16世紀末のイタリア製古地球儀や、現在の海図の前身にあたる羊皮

美学美術史学講座が保管している作品のうち最も重要なものは、「たなばた」「文正」「蓬来物語」など6部計14冊の奈良絵本である。室町時代後半から広く流布した題材を扱っており、製作年代は江戸時代初期であるが、構図・モチーフは15世紀の作品にまで遡ることができ、美術史的にも資料的価値の高い作品である。その他、大英博物館・ベルリン国立博物館収蔵の中国敦煌や新疆省で発見された壁画の模写、平等院彫絵を始めとする日本古代絵画の模写など、美術史研究のうえで貴重な資料が数多く収蔵されている。



「たなばた」 下冊の1図、紙本着色

建 物 と 観 覧 の 案 内

博物館は、1914年（大正3）にできた旧館と、1986年（昭和61）竣工の新館とからなっている。旧館は武田五一教授の設計、完成当時その優美をうたわれた建築であり、新館設計（川崎清教授の指導）にさいしては、デザインのモチーフを旧館の延長・展開とするよう配慮、屋根・破風・換気孔・窓・壁面等の形態に連続性がみられる。

新館は地域社会に公開されることをめざし、東大路に玄関を開いている。このため、おもくらしい石垣を破り、アカデミックな深みを持ちながらも、明るい空間をつくりだすよう意識されている。また、博物館にとって大切な収藏品と展示物の保存をはかるため、できるだけ外部からの熱を避けるよう、外観・構造ばかりでなく、材質や色についても細心の注意が払われている。

公開部分

- 1階 ロビー、石棺展示室、
第1総合展示室(考古資料)
- 2階 ロビー、企画展示室、
第2総合展示室(歴史・地理・美術資料)
- 3階 講演室(公開講座等)

上記の部分以外は、研究教育棟として、学部・大学院及び専門分野の研究教育に専用し、一般には公開していない。

開館日・開館時間

一般公開は、春・秋各2か月間の予定。（このたびの開館記念展示は、11月1日から12月19日まで）。

期間中は、毎週月曜～金曜は午前9時30分から午後4時30分まで。土曜は午前9時30分から正午まで。日曜・祝日は休館。

京都大学の教職員・学生は、公開期間中、身分証明書・学生証を提示のうえ、入館できる。

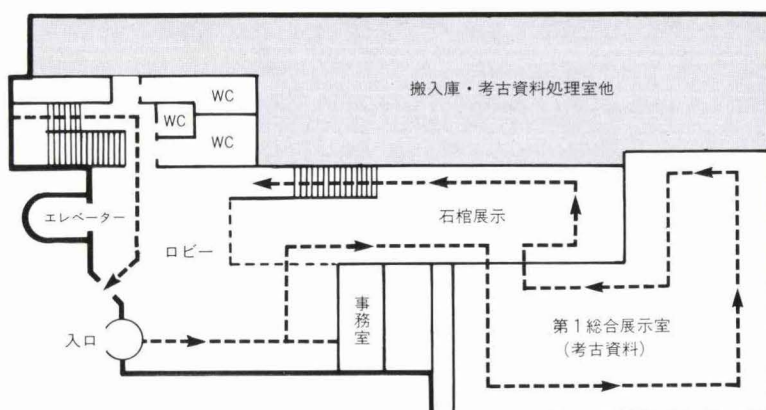
建築規模

新館建築面積 1,330.3㎡

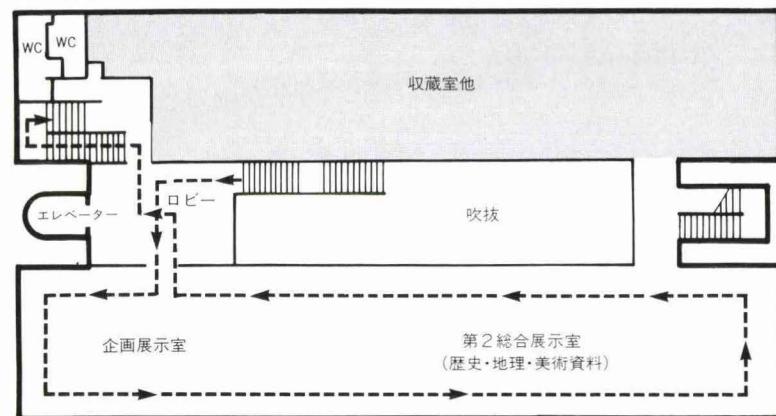
延床面積 5,090.7㎡

旧館保存部分延床面積 1,464.0㎡

1 階略図



2 階略図



新館延床面積の部門別内訳

展示	789.6㎡	(15.5%)
収蔵	845.1㎡	(16.6%)
研究教育	1,474.3㎡	(29.0%)
サービス	411.2㎡	(8.0%)
管理	176.0㎡	(3.5%)
その他	1,394.7㎡	(27.4%)

正面玄関の門標、ロビーの胸像

玄関の「京都大学文学部博物館」の字は、湖南内藤虎次郎博士の書より集字したもの。

ロビーに置かれた胸像は、文学部史学科の創設者内田銀蔵博士である。